

日韓保護条約直前の海外視察

— 尹致昊日記（一九〇五年）の日本とハワイ視察を中心に —

柳 忠 熙

目次

- 一、日韓保護条約直前の尹致昊の海外視察
- 二、日本視察団の派遣とハワイ移民実態の視察の経緯
- 三、保護条約の前夜の日本視察記——日本に対する相反する態度
- 四、ハワイの韓人社会の視察記——韓国（人）に対する啓蒙の視線
- 五、保護国化の前夜の記録

一、日韓保護条約直前の尹致昊の海外視察

大韓帝国をめぐる日本とロシア間の利害問題が急激に悪化し一九〇四年二月に日露戦争が勃発する。戦争の末、日本の勝利が確定になっていくなか、一九〇五年一月に大韓帝国は日本と保護条約を結ぶ（日韓保護条約「第二次日韓協約、乙巳保護条約」）。この条約の締結によって大韓帝国は日本の保護国となり、外交権を喪失し、翌一九〇六年二月に内政への助言や摂政を目的とする機関として統監府が設置される。

大韓帝国政府は、日韓保護条約が締結される四か月前の一九〇五年七月に日本の実情を探るために視察団を派遣する。外部協弁であった尹致昊（ユン・チホ）も当使節団に同行する¹。そして、同年八月より、尹はほかの使節団と離れて独りで韓人の移民実態を視察するためにハワイに向かう。

尹致昊は、一八九五年に十余年の海外亡命生活を終えて朝鮮に戻ってきた。帰国後、一九一〇年の日韓併合まで、尹は教育や言論や宗教の分野で活発に活動し

た。朝鮮政府において尹致昊は、学部協弁と地方官も務めたが、主に外部協弁と外部大臣署理などの外交業務に携わっていた。尹がこのような外国関連業務に起用されたのは、彼の長期間にわたる海外生活と、英語をはじめとする多数の外国語が駆使できたからである。

先行研究では、尹致昊は海外体験を通じての開化思想の受容²、外国語習得³、キリスト教への入信⁴など、近代知識人への変容について論じられている。とくに海外体験と尹致昊の思想の問題について、最初の海外体験である日本留学（一八八一〜一八八三年）と、甲申政変（一八八四年）の失敗による十余年の歳月を中国とアメリカで過ごした長期滞在が注目されてきた。漢文や国文や英文で作成された尹致昊の「日記」⁵には、日本留学期の後半に当たる一八八三年の生活と一八八五年より一八九三年までの中国およびアメリカでの生活が詳細に記されている。しかし、これまでの研究では、この時期を海外留学期あるいは海外亡命期として包括的に捉えて分析し、その時期に行われた個別的な尹致昊の旅自体にはあまり注目されていない⁶。日韓併合（一九一〇年）以前の尹致昊の私的旅行だけを例として挙げてみても、中国滞在期に中西書院の同学である永見とともにした蘇州旅行（一八八八年七月二日〜九月一日）、アメリカ留学のために日本へ渡った長崎旅行（一八八八年七月二日〜九月一日）、アメリカ留学を終えて帰国するときにアメリカ北部および日本を経て帰ってきた帰国旅行（一八九三年九月一三日〜十一月四日）などがある。そして、朝鮮政府の使節団として外国を訪ねたロシア皇帝ニコライ二世戴冠式の祝賀使節団（一八九六〜一八九七年）、日本とハワイ視察（一九〇五年）など、公的な旅の記録も「日記」に確認できる。

海外旅行は旅行者に自分が属した日常的で馴染のある環境あるいは自文化の空間を離れる経験を与える。異文化のなかで経験した対象に対する反応は、同時間の旅した人々であっても異なることもある。しかし、旅行者は共通的に非日常的で馴染のない異文化の空間に入り、馴染のない対象を経験しながら、異文化空間のなかで自分の位置を考えるようになる。また、旅行者は自国を離れて世界のなかで自我と自国の位置を考えさせられる。海外旅行は、それを通じて自分が属する社会および国の国際的な位置を相対化して考え直すきっかけになる。つまり、海外旅行は、意識的であれ無意識的であれ、これまで生きてきた自国の自文化に基づいた旅行者の思想と世界観に変化をもたらすのである。

本稿では、分析のために中短期旅行と長期滞在のような期間による区分とともに、旅行の目的と旅行を計画する主体によって私的旅行と公的旅行を区分する。

前述した異文化体験の旅行者への影響は、短期旅行のような短い期間の旅行のほうが、長期滞在よりも強く作動すると思われる。例えば、尹致昊は中国およびアメリカで幾年も滞在しており、滞在期間が長期化すればするほど、その空間は日常的なものに変わり、旅行者は居住者の感覚を持つことになる。

旅行によって私的性格と公的性格が共有され区分しにくい場合もある。しかし、本稿では個人の意思で計画を立てて旅することを私的旅行とし、一方、公的機関、例えば、朝鮮や大韓帝国の政府が派遣する使節団としての旅行を公的旅行として区分して検討する。

私的旅行と公的旅行は旅や派遣を企画する主体が異なる。また、その主体によってその旅の目的が厳格に異なる。例えば、一八九六年にロシアへ派遣された朝鮮使節団は、ロシア皇帝のニコライ二世の戴冠式に参加するという表面的な目的とともに、ロシアの軍事的かつ経済的支援を交渉する裏面的な目的もあった⁷。そして、公的旅行は費用や旅程や使節団の待遇など、私的旅行者とは異なる。例えば、本稿で検討する一九〇五年の日本視察団の場合、日本の先進施設を見学したり、当時の総理大臣である桂太郎との接見など、一個人の旅行では経験しにくい出来事を経験する。このように使節団の個人は、自国の使節という公的存在として考えられている。そこで、公的旅行における使節団の一員は、前述した異文化空間のなかで、自分あるいは自国が置かれた状況に一層敏感に反応せざるを得ない。本稿では、こうした公的旅行と異文化空間に置かれた尹致昊の反応を「日

記」を通じて探ってみる。

日記は毎日起こる出来事を記録するものである。しかし、旅行中に記された日記は、日常的に起こった出来事についての感想とは異なり、旅行地の異文化的状況の影響を受けて作成された記録である。日記の読者は基本的に記録者本人である。日記は単純に毎日〈記録する作業〉であるだけでなく、それを記録した書き手が読み手として再び自分の日記を〈読む作業〉が伴われる。こうして読者として海外旅行時の日記を読み直すことで、日記の書き手は自身の過去の自分と会話し、日常の経験とは異なる情緒的な経験を改めて喚起させる。つまり、日記は日記の書き手に過去の海外旅行の感覚を間接的に確認させる媒体でもあるのである。

本稿では、旅行記的な性格を持つ日記というテキスト性を念頭におき、尹致昊が一九〇五年に締結された日韓保護条約の直前の状況を記した日本とハワイの視察の「日記」(一九〇五年七月―十一月)に注目する。本稿では、日韓保護条約を目前とした歴史的な状況を考慮し、日本とハワイの視察の経緯を確認すると同時に、「日記」から見える日韓保護条約の前夜の日本、そしてハワイでの韓人社会についての尹致昊の経験と感想を検討する。こうした尹致昊の海外旅行の様相を分析することで、日露戦争および当時の日本に対する彼の考え、そして、これらとも関わる当時の韓国(人)⁸に対する朝鮮知識人の理解の一例を示す。

二、日本視察団の派遣とハワイ移民実態の視察の経緯

一九〇五年七月一七日、大韓帝国の日本国視察事務員(以下、日本視察団)⁹が釜山港より日本へ出発する。視察団は尹致昊を含む以下の十一名である。尹致昊によれば、日本視察団は十一名の官僚とともに通訳官などを含めて二五名で構成されていた¹⁰。

【表1】 日本国視察事務員の構成員¹¹

- 表勲院総裁 関内奭 (ミン・ビョンソク)
- 度支部大臣 関泳綺 (ミン・ヨンギ)
- 陪従武官長 趙東潤 (チョ・ドンユン)
- 中樞院賛議 閔商鎬 (ミン・サンホ)
- 外部協弁 尹致昊
- 弁理公使 李範九 (イ・ボムグ)
- 宗簿司長 李達鎔 (イ・ダルヨン)
- 陸軍副領 金成殷 (キム・ソンウン)
- 陸軍正尉 全永憲 (チョン・ヨンホン)
- 陸軍副尉 李甲 (イ・ガプ)
- 六品兪致高 (ユ・チソル)

日本視察団は下関まで日本郵船に乗って移動し、その後は汽車で大阪を経て東京に到着し一ヶ月余り滞在する。「日記」の記録によって確認できるソウルから東京までの日程は以下のとおりである。日本視察団の日本滞在期間がどの程度だったのかは定かではないが、「日記」で確認できる日本視察団の日本滞在は八月二九日までである。尹致昊が同日に一行と別れ、ハワイに行くために横浜に移動するからである。

【表2】 韓国政府の日本国視察団の日程 (一九〇五年七月一五日～八月二九日?)
 ソウル (一九〇五年七月一五日出発) 「鉄道 (京釜線)」 ↓ 大邱 (七月一五日)
 ↓ 釜山 (七月一六日到着、翌一七日に日本へ出発) 「船」 ↓ 下関 (七月一八日)
 「鉄道」 ↓ 大阪 (七月二〇日) ↓ 東京 (七月二二日～八月二九日) 「尹致昊は横浜に移動」

日本視察団が日本に来た表面的な理由は当時の日本の実態を確認することだった¹²。だが、その真の目的は、日本の元老である伊藤博文を大韓帝国政府の最高顧問として招聘することを秘密裏に交渉するためだった。当時の在韓日本公使の林権助が日本の外務省に送った電報には、使節団の関内奭が伊藤博文を招聘する

高宗の密書を持っていくという内容¹³がある。実は、関内奭の背後には、当時京釜線の建設に関わった大江卓がいて、大江がすでに日本政府の元老の井上馨の同意を得ている状態だった¹⁴。

尹致昊が関内奭の秘密計画を知っていたのか、またその工作に関与していたのかは定かではない。一九〇五年七月二日付「日記」には「視察団 (觀光客) [Inspectors (Sightseers)]」とだけ記されている。そして、同年七月二七日付「日記」には、尹致昊が関内奭・関泳綺・閔商鎬・趙東潤とともに伊藤博文に会った記録がある。このとき、関内奭は今回の来日の目的は内閣と樞密院制度およびその実態を確認するためだと伊藤に伝えており、秘密交渉については公的な場では話していない。この時期の「日記」の内容だけを考慮すれば、尹致昊は関内奭の伊藤招聘計画について知っていなかったと推定される。

関内奭らの秘密交渉が結果的には成功し、伊藤博文は韓国に渡ってくる。しかし、鄭喬 (ジョン・ギョ) が指摘したように逆説的に伊藤が保護条約を締結する張本人となり、以降韓国統監として (最高顧問) となる¹⁵。

尹致昊は日本視察団に参加した後、八月三〇日にハワイに韓人移民視察の実態を確認するために出発する。

【表3】 尹致昊のハワイ視察の日程と帰路 (一九〇五年八月三〇日～二月六日)
 横浜 (八月三〇日) 「船出発」 ↓ ハワイ 「九月八日到着」 ↓ 一月三日ハワイ出発
 ↓ 横濱 (一〇月一四日) 「汽車」 ↓ 東京 (一〇月一四日～十一月二日) ↓ 神戸 (十一月三日) ↓ 下関 (十一月四日) 「船」 ↓ 釜山 (十一月六日) ↓ ソウル (十一月六日)

尹致昊のハワイ訪問は、砂糖農場協会 (The Sugar Planters Association) の代表の一人であるスワンジー (Swamy) の提案によって当協会の招待という形を取っていた¹⁶。大韓帝国の外部は尹致昊にハワイ視察とともにメキシコの韓人移民の実態を視察することを命じた¹⁷。こうした海外韓人移民実態調査は、八月に出された高宗のメキシコ移民者の実態調査および処置に関する詔令¹⁸によるものであった。尹は約一ヶ月間のハワイ視察で、ハワイの諸島の三二ヶ所の農場と約五〇〇〇名の韓人らを対象に演説を行った¹⁹。彼のハワイ視察は、ハワイの韓人の実態を確認するとともに、韓人の移民者を慰めて指導することにその目的が

あった。

一〇月一四日、尹致昊は東京に戻り、メキシコの韓人移民視察のために待機する。その後、メキシコでの滞在資金などの問題で視察は中止され、結局帰国することになる²⁰。彼が一月六日にソウルに帰ってきて間もなく、伊藤博文が日本の特命全権大使として韓国を訪れ、一月一七日に大韓帝国と日本との間には保護条約が締結される。

三、保護条約の前夜の日本視察記——日本に対する相反する態度

日本視察団は一九〇五年一月に開通した京釜線を利用して釜山に向かう。尹致昊は京釜線の鉄道旅行を通じて、朝鮮半島における日本の経済的かつ社会的な占と韓国人の悲惨な生活を確認する。

三〇〇マイル「約四八三キロメートル」を超える京釜線は非常に肥沃な土地を突っ切る。鉄道に沿って立っているすべての里程標「は日本語表記であり」、各駅には韓国人の露店販売も許されていない。お菓子などを売っている人はすべて日本人である。京釜線の地名は日本語発音で記されている。例えば、成歓はソフアンではなくセイカンなど。掲示板など、すべてが日本語だ。所々の韓国人のわら屋は土窟よりもよくない。まことに可愛そうだ。夜には韓国人の家または韓国人の村には明りを見ることができない。日本人たちが住むところには明りがあり和気藹々だ²¹。

尹致昊によれば、当時の京釜線の表記は、すべて日本語の発音で記されており、売店などの商業行為は日本人のみ許可されていた。そして、韓国人のわら屋は土窟に比べられるほど悲惨な状態であった。彼は朝鮮半島の自然が韓国人の虐待によって呻いているという。韓国人は自然を管理するためにダムや堤防を作るよりは、伐採して使うのみである。こうした韓国人の態度は「難しい問題に対してとても怠けており、とても消極的」²²な性格によると評する。当時の朝鮮半島において日本勢力が次第に拡大していくなか、鉄道旅行を通じて経験する朝鮮半島と韓国人の様子に関する尹致昊の評価には、こうした批判的な眼差しが前提とされ

ていた。

一方、下関に着いた尹致昊は、日本社会について自分を興奮させる空間として評価する。

単調な韓国人の生活から詩的な日本への変化の効果は、私を興奮させる。秩序や制度や法や清潔や明りや楽しさや幸福が欠如している地から、秩序や制度や法や清潔や明りや楽しさや幸福で満ちる国へ。韓国ではすべてがとてもみずほらしい。そこ「韓国」の人々は自然の美しさを改良して美化することを見過ごしてきた。可哀想な韓国!²³

尹致昊は韓国社会を「秩序や制度や法や清潔や明りや楽しさや幸福」が欠けている単調なところだと述べる。一方、日本社会を、こうした諸条件が備われているところとして評する。また「洗練された趣を持つ人々「日本人」によって自然の美しさが保全され向上されていくことは賞賛に値する」と日本人の自然に対する態度を肯定的に評価する。東京では下層民である人力車の労働者も「下品で汚い言葉を言わない」と指摘し、反対に韓国人は「汚く悪口が出る習慣」を持つ存在に位置付けられている²⁴。尹は日本人が「自然と人間が互いに競争することを通して日本を極東の楽園」にしたという。続けて「もし私が故国を選べられるのなら、ほかの国より日本を選ぶ」と個人の私的次元で日本を好評する²⁵。彼が日本を旅するときにつけた「日記」で見られる日本に対する評価には、このように尹致昊の個人の私的次元においては、肯定的な眼差しが見受けられる。

この旅行期間の「日記」には、韓国(人)と日本(人)を比較する彼の眼差しが絶えず作動する。韓国(人)と日本(人)を比較する尹致昊の行為は、彼自身が両方を客観的に観る抽象的な観察者と想定するときにも可能となる。ところが、日露戦争の勝利の雰囲気が高まり、日本によって大韓帝国の安危が脅かされる状況での日本滞在は、彼に韓国人としてのアイデンティティを絶えずに思い起こさせる。日本視察団が日本に滞在する同時期に、アメリカのルーズベルト(Roosevelt Jr.)大統領の娘であるアリス・ルーズベルト(A. Roosevelt)と国防長官のタフト(W. H. Taft)が日本を訪れる。このとき、桂太郎とタフトが日本の大韓帝国の領有とアメリカのフィリピンの領有を相互に承認する桂・タフト協

定が締結される。日本社会はアメリカの使節を歓迎する雰囲気盛り上がりつつあった。一方、韓国からの視察団は無関心の対象であった²⁶。尹致昊は日本人が韓国人に対して「すべての人々が軽蔑や軽視や無視のさまざまな兆候」を示しているので、韓国人に冷淡な東京に長く泊まることできないという。

前述した尹致昊の日本（人）についての肯定的な評価は、個人の私的次元の好感によるものだったことに注意する必要がある。彼は韓国と関わる政治的で公的な次元では日本を辛辣に批判しているからである。

私は日本がロシアに勝利したことは嬉しい。鳥の人々は誇らしく黄色人種の名譽を守ってくれた。白人は何世紀にもわたって東洋の諸民族の主人として長く振る舞ってきた。日本が独りでその呪縛を解いたのは遠大な計画である。もし日本が失敗したとしてもその英雄的な行動の雄大さは永遠の榮幸として残るだろう。考えてみよう。日本が勝利したことのように、黄色人種がこの世の中で顔を上げることができるか！

私は日本を同じ黄色人種として愛して誇らしく思う。しかし、韓国のすべてとその独立を奪おうとする日本を、韓国人として憎む²⁷。

尹致昊は日本がロシアに勝った事実を嬉しく思いながらも、その嬉しさは東洋人としてそして黄色人種としての名譽を、日本が守ってくれたからだという。彼は人種主義的な観点から日本の勝利を高く評価しているが、「韓国のすべてとその独立を奪おうとする日本を、韓国人として憎」んでおり、韓国の独立を脅かす日本を批判する。

尹致昊はハワイ視察を終えて一〇月一四日に再び日本に戻ってきて滞在することになる。尹は戦勝に盛り上がった雰囲気の間として当時の日本社会を記録する。しかし、日露戦争の講和会談の内容を新聞で読んだ尹は「日本が韓国で指導や保護や監理などの業務を行う必要がある」ということを、ロシアより認めてもらったことを確認する²⁸。そのとき、彼は韓国の変えられない運命を感じる。東京と横浜の戦勝を祝うイルミネーションと東郷平八郎の凱旋式など、日本の戦勝を祝う雰囲気なかで、尹致昊は「私は日本的な色合いのさまざまな光景がとても嫌だ。私は彼ら「日本人」の歌がとても嫌だ。私は彼らの歓呼を聞くことがと

ても嫌だ。」²⁹と絶望に近い不快感を表す。尹致昊は戦勝を祝う日本社会の明るい表面より、韓国の独立喪失という暗い裏面を読み取っていたのである。

四、ハワイの韓人社会の視察記——韓国（人）に対する啓蒙の視線

一九〇五年九月八日、尹致昊はハワイのホノルルに到着する。その後、尹はハワイの諸島を周り、農場主らおよび韓人らと面談などを通じて移民の実態を調査する。ハワイに韓人の移住が始まったのは、一九〇二年にハワイ砂糖農場協会からの要請によるものであり、協議後に韓国政府の許可が出された一九〇三年から保護条約が締結される一九〇五年まで続く³⁰。この期間中の移民者数は七二二六名に達した³¹。

尹致昊はハワイ韓人社会において韓国人の近代的な個人倫理の欠如および素養の不足を読み取る。一九〇五年一〇月三日付「日記」にはハワイでの経験を整理した感想がある。尹はそこに韓人が貯蓄をしていないと周りから批判されていると記している。こうした韓人たちの無節制な生活を念頭においたからなのか、尹致昊は韓人向けの演説で幾度も「勤勉さ、節約、清潔さ、堅実さの習慣」を身に付けることを訴える³²。尹の演説は韓人たちの近代的な個人倫理および素養の向上を試みる意図があったと言えよう。

ハワイ視察期の「日記」には韓人とハワイ原住民のカナカ人（*Kanaka*）を比較して論じている箇所がある。興味深いのは、尹致昊はカナカ人がハワイ諸島で消えていく様子を、将来の韓国人に來たる運命に重ねて述べているところである。

ハワイ人あるいはカナカ人はどこにいるのか。彼らは急速に消えている。ある人は私に言う。宣教師と彼らの教え、「つまり」彼ら「カナカ人」の原始的で健全な生活とする習慣から遠ざける教育によって土着民族を滅亡させている、と。「もう一つの話は」宣教師らは、悪い白人が鳥の人々に紹介したカナカ人の破滅の原因となったアルコール依存、そしてほかの不道德と弊害を抑制した「と」。私は二つの意見のなかで後者が可能性のある話だと思う。しかし、最もの原因は、白人たちとほかの人種が持ち込んできた生活と闘争して生き残ることができなかつたことを立証したカナカ人自らの救済のできない怠けさに

ある。それ「についての」関心と苦痛は、私にカナカ人の特徴が韓国人の特徴ということをおい出させる。(一) 良い気質、(二) 親切さ(三) 怠けさ。私はカナカ人が自分より、すこし「でも生活が」いい友だちあるいは親戚が破産するまで彼らの金で生活をするという話を聞いたことがある。彼らは、その次にほかの友だちの草屋に移り、彼「その友だち」が破産するまで寄生するなどと。(二) 怠けさ。カナカ人は飢えて大変でないかぎり仕事をしない。そして、彼はわずかな銭のために仕事する「だけであり、その後」できるかぎり長く彼の幸せと怠けさが再び続くのだ³³。

尹致昊は、まず宣教師たちの新式教育がハワイの原住民たちの健全な文化を破壊したという意見と、もう一つ宣教師たちが白人によって広まった悪徳と病、そしてカナカ人の「不道徳と弊害」などそれらについて啓発しているという相反する両意見を述べた上で、後者に同意を示す。しかし、尹はカナカ人の滅亡の根本的な原因として彼らの「救済のできない怠けさ」を挙げており、カナカ人自らが「白人たちとほかの人種が持ち込んだ生活と闘争して生き残ることができなかったことを立証した」と評価する。彼はカナカ人の特徴を「(一) 良い気質、(二) 親切さ(三) 怠けさ」と整理し、遺憾ではあるが、この三つの特徴は韓国人とも一致すると述べる。彼はカナカ人がこの特徴のなかで「怠けさ」のせいで絶滅の危機に晒されたと結論付け、韓国人の運命をカナカ人の運命と同一視する。尹致昊がハワイ視察から日本に帰ってきた後、大韓帝国が日本の保護国になる運命であることを感じながら「日本人の暴政の炎のなかで、韓国人が生き残るためには、彼ら「韓国人」が生存に適していることを立証する必要がある」と指摘する。「もし彼ら「韓国人」がハワイ人より、優れてなく、屈して「しまえば」生存を保つことはできない³⁴」とハワイ原住民の滅亡を韓国人の未来の反面教師として捉える。

そして、尹致昊は韓国の政界で横行する政争をハワイの韓人社会から読み取る。「日記」によれば、当時ハワイ韓人社会に植民会、忠義会、キリスト教徒会など、幾つかの韓人会が形成されていた³⁵。尹は韓人コミュニティ間で韓国政府の経済的支援を受けるために政争が起っており、このなかで互いを「逆賊」だと公然に批判することを問題視する。彼は韓人に対する演説で「逆賊」という言葉は「い

わゆる忠臣 (loyal man)」という不正な輩たちがこれまでの何十年の間、愛国者を殺して自分自身の私利私欲のみを求めするために使われてきた言葉であることとを力説する。こうした「忠臣」たちが「本当の逆賊」であり、「退化されて荒廃となつた今の韓国の状況をもたらした」と批判する。

このように尹致昊は韓国が日本の保護国という状況に陥ってしまった原因を、韓国政府の大臣らの政争と暴政のような間違つた政治にあるとみた。一九〇五年九月九日付「日記」には、アメリカでサバティカルを終えて韓国へ帰国したノーブル (W. A. Noble) とハワイで会つたという内容がある。そこには当時の韓国政府に対する尹致昊の考えが端的に読み取れる。

彼「ノーブル」によれば、彼がアメリカに滞在中、アメリカ大統領に会つて韓国の主張を提示し、大統領は韓国を助けるすべてのことをすると約束したという。彼はアメリカの大統領が悲惨で抑圧されて荒廢な韓国を助けるために時間を費やして努力するのだと考えている！ 压制と不正な輩たちによる暴政の状況から韓国が抜け出すために助けとなるものはない³⁶。

ノーブルはアメリカの大統領との会見で韓国をめぐる問題について議論し、そのとき、大統領が韓国を助けることを約束したと、尹致昊に伝える。この話を聞いた尹は「压制と不正な輩たちによる暴政の状況より韓国が抜け出すために助けとなるものはない」と言いながら、韓国の危機的状況は、内部的なものであり、政治の腐敗と暴政に根本的な原因があると指摘する。尹致昊が日本で伊藤博文と面会したとき、日本がこのような「韓国のすべての悪の根源」を知っており、「日本は韓国を優しい自分の腕のなかに抱くために、韓国が有するその悪を保護し増大させるのだ」と書き残していた³⁷。つまり、尹致昊は韓国が日本の保護国になる危機に直面した根本的な原因として、韓国政府の腐敗と内政の失敗を取り上げている。日本はその韓国の悪をうまく利用して「優しい自分の腕のなかに抱く」ことにしたのである。

五、保護国化の前夜の記録

尹致昊は一九〇五年七月から同年十一月にかけて韓国政府の視察を目的として日本とハワイを訪問する。尹致昊のこの旅は、彼にとって日本留学と十余年の亡命海外留学を通じて確認してきた韓国（人）と日本（人）の差異を再確認した経験であった。と同時に日露戦争の戦勝国の日本によって保護国となった自国の暗い未来を実感させられる旅でもあった。ハワイ視察を通じて、尹致昊は韓人たちの近代的な個人倫理および素養の不足を指摘する。そして、韓国社会で蔓延している政争が異国の地においても行われていることを確認する。こうした海外の韓人社会を視察するなかで、韓国政府の政治的な失敗が、日本の保護国となるしかない韓国の運命の原因であることを感じ取ることになる。尹は韓国の暗い将来を予感し自ら確認するなかで、日本とハワイでの経験と感想を「日記」に如実に記している。

この旅の五年後の一九一〇年には日韓併合が行われ、韓国は日本帝国の一地域としての「朝鮮」となる。植民地朝鮮を生きた尹致昊は、五年前の韓国政府の公的な海外旅行の日記を再び読み直しながら、日韓併合前の状況を回想して韓国／朝鮮（人）について再び思うこともあっただろう。

本稿では、一九〇五年に締結された日韓保護条約の前夜の韓国（人）についての尹致昊の認識を、彼の日本とハワイ視察を記録した当時の「日記」を通じて検討した。本稿は個別の事例に過ぎず、尹致昊の海外旅行における韓国／朝鮮（人）がどのように表象されているのか、その含意と認識の変化を時期的に検討すること、その特徴と様子を立体的に示すことができるだろう。また、植民地期に入って、帝国日本の一地域の民族として位置付けられた朝鮮（人）に対する尹致昊の認識が日韓併合の以前の韓国（人）に対する認識とどのように異なるのか、そしてこうした認識が時期によってどのように変化していくのかなどの問題は、今後の亡国を経験した朝鮮知識人の植民地統治と朝鮮（人）観との関係性などを明らかにするテーマにもつながる。筆者は、植民地初期にあたる一九一〇年代における尹致昊の三・一独立運動に対する朝鮮独立不能論のような態度について検討したことがあり、本稿で確認した自助論的な思考が朝鮮（人）ひいては朝鮮の独立を不可能だと判断する基準となっている³⁸。こうした植民地期の尹致昊の朝

鮮（人）認識は、本稿で確認した韓人移民者の近代的な個人倫理の欠如や素養の不足といった彼の自助論的な観点にも関連する面がある。植民地期の尹致昊の朝鮮（人）認識の問題は、朝鮮（人）の個人の素養という啓蒙的な眼差しとともに、帝国日本の植民地統治や戦争などによる朝鮮（人）の問題がまた複雑に絡み合っていくことになるが、これらの問題については今後の課題としたい。

注

1 本稿では、便宜上、朝鮮の官職および朝鮮人の人名を日本語の常用漢字に改めた。

2 박정신 「윤치호 연구」 『백산학회』 第二三輯（백산학회, 一九七七年）。 민경배 「초기 윤치호의 기독교 신앙과 개화사상」 『동방학지』 第一九輯（연세대학교 국학연구원, 一九七八年）。 유영렬 「개화기의 윤치호 연구」 （경인문화사 二〇一一年「一九八五年」）。 이광린 「윤치호의 일본유학」 『동방학지』 第五九輯（연세대학교 국학연구원, 一九八八年）。 양현혜 「윤치호와 김교신——근대 조선의 민족적 아이덴티티와 기독교」 （한울아카데미, 二〇〇九年「一九九四年」）。 허동현 「1880년대 개화와 인사들의 사회진화론 수용양태 비교 연구——유길준과 윤치호를 중심으로」 『사총』 第五五輯（역사학연구원, 二〇〇二年）。 拙著「第三部 尹致昊의 政治思想의 變容と 自由思想」 『朝鮮の近代と尹致昊——東アジアの知識人エトスの変容と啓蒙のエクリチュール』（東京大学出版会, 二〇一八年）など。

3 이광린, 上掲論文（一九八八）。 拙著「第一章 尹致昊의 海外經驗と 英語學習」 上掲書（二〇一八）など。

4 박정신, 前掲論文（一九七七）、三五七―三六二頁。 민경배, 前掲論文（一九八五）、一六五―一六九頁。 유영렬, 前掲書（二〇〇九）、六三―六八頁。 양현혜, 前掲書（二〇〇九）、三五―四一頁。 안신 「좌옹 윤치호의 종교경험과 종교론——종교현상학적 해석」 『한국기독교와 역사』 第二七輯（한국기독교역사연구소, 二〇〇七年）、五二―五四頁。 拙著, 同書（二〇一八）、二九四―三〇二、三〇五―三〇九頁など。

5 本稿では尹致昊『尹致昊日記』（全一一卷、国史編纂委員会、一九七一）

一九八九年)を便宜上「日記」と指し、作成日(西歴)のみを記す。とくに注が無い場合は、「日記」の原文は英文であり、以下「日記」の引用文の日本語訳は引用者による。「」は引用者による注であり、以下同じである。

6 筆者は一八九六年ロシア皇帝ニコライ二世の戴冠式に祝賀使節団として尹致昊がヨーロッパを旅行して経験したことについて論じたことがある。拙著「第三章 英文で〈再現〉された西洋——「日記」に記されたヨーロッパと朝鮮使節団の文化的ダイナミズム」、前掲書(二〇一八)。

7 拙著、上掲書(二〇一八)、八九〜九〇頁。

8 本稿で言う「韓国」は、現在の大韓民国を指すのではなく、朝鮮が一八九七年に国名を「大韓」に変えた大韓帝国を意味する。本稿の「韓国人」「韓人」も大韓帝国の人々を指す。「朝鮮」「朝鮮人」はこの時期を前後とする朝鮮王朝および植民地朝鮮などと朝鮮半島に生きた人々を指す広意として使う。

9 「漱玉軒で日本国に赴く視察事務員等を召見した。(召見赴日本国視察事務員等于漱玉軒。)」『高宗実録』四六卷、光武九年(一九〇五年)七月一四日。原文は漢文である。日本語訳は引用者による。以下同じである。

10 「日記」一九〇五年七月一五日・八月三〇日。

11 『高宗実録』四六卷、光武九年(一九〇五年)七月一〇日。

12 視察団が日本に赴く前に高宗に挨拶をしたとき、高宗は「今日の状況をみれば、外国の事務を知らなければならぬ。そこで、卿たちを遠く送る。今回行って視察をよくし、実効のあることを期待する。(見今形勢、外国事務、不可不知。故使卿等遠行。則今行善為視察、期有実効也。)」と言った。

13 「韓帝伊藤侯招聘方ヲ閔丙奭ニ委任ノ件」『日本外務文書』第三八卷、明治三八年(一九〇五年)七月一四日。

14 「韓帝ノ伊藤侯招聘ニ閔シ大江卓ノ裏面工作ノ件」『日本外務文書』第三八卷、明治三八年(一九〇五年)七月二二日。

15 鄭喬は、閔丙奭が密かに高宗に伊藤博文の招聘を議論し承諾を得たので、日本視察団として渡日するようになったという。また、鄭はこの招聘の件で伊藤博文が韓国に渡ってきたと指摘する(『大韓季年史』卷七、光武九年(一九〇五年)一一一―一一二条)。

16 「日記」一九〇五年八月二二日。

17 「日記」一九〇五年八月二八日。

18 『高宗実録』四六卷、光武九年(一九〇五年)八月一日。

19 「日記」一九〇五年一〇月三日。

20 「日記」一九〇五年七月二八日。

21 「日記」一九〇五年七月一六日。

22 同「日記」。

23 「日記」一九〇五年七月一八日。

24 「日記」一九〇五年七月二五日。

25 「日記」一九〇五年八月六日。

26 「日記」一九〇五年七月二五日。

27 「日記」一九〇五年九月七日。

28 「日記」一九〇五年一〇月一六日。

29 「日記」一九〇五年一〇月二五日。

30 김원용著・손보기編『재미한인 50년사』(혜안, 二〇〇四年「一九五八年」)、一九〜二三頁。尹致昊はハワイ視察後にメキシコ移民者の実態を確認するためにメキシコに向かう予定だったが、旅費の問題で実現できなかった。韓人が初めてメキシコに移民したのは、一九〇五年からであり、そのとき一〇三一人がメキシコに渡った。当時イギリス人のマヤスが韓国政府には秘密裡に不法移民を募集し、四年間の契約と監禁などの不法契約が行われて問題となっていた(김원용, 上掲書、一九・二三〜二七頁)。

31 김원용, 同書、一九頁。

32 「日記」一九〇五年九月一〇日・一八日。

33 「日記」一九〇五年一〇月三日。

34 「日記」一九〇五年一〇月一六日。

35 「日記」一九〇五年九月一八日。

36 「日記」一九〇五年九月九日。

37 「日記」一九〇五年七月二七日。

38 拙著「第九章 植民地朝鮮と自助論の政治的想像力」、前掲書(二〇一八)。